

策彦周良の手になる片仮名交りゾ体の資料について

柳 田 征 司

一 はじめに

筆者は、天龍寺妙智院第三世策彦周良（一五〇一—一五七九）を
惟高妙安（一四八〇—一五六七）と親交のあった僧として注目し、
その著作に片仮名交りゾ体の資料の存することを抄物を考える上か
ら注意してきた。策彦の手になる片仮名交りゾ体の資料、又はそれ
を含む資料としては、『蠶測集』『策彦和尚筆記』『四六図』『策
彦和尚初渡集』『再渡集』備忘記の五点が伝存する。これらについ
ては牧田諦亮氏等によって扱われたことがあるが、その諸伝本や國
語資料としての性格についてはいまだ説明されていない。本稿は、
これらの資料を調査整理して、その文体の性格について考えてみよ
うとするものである。

二 各資料の整備

（一）『蠶測集』

次の二類の本が管見に入った。（注3）

原形本：①東京大学史料編纂所群書類従本②統群書類従所収
本③『叢林両部抄』所収本④国立国会図書館本
改編本：⑤宮内庁書陵部本

原形本は①②と③④とに分けられる。③④には①②の終りの部分
（統類従五九五頁下4「紅釋迦紫弥勤」以下）がない。本文も、①
と②は極めて近く、③と④もかなり近い。

⑤の書陵部本は、①④にない同種の注を相当量もつだけでない。

く、共通部分^(注)についても本文の配列が異なる。⑤は「仏祖」(1才より)と「儒者[≠]維部」(13ウ8より)とに分けられており、今②を

軸にとってその対応関係を示すと表のようになって^(注)いる。(紙幅の都合で一部を示す)

A														番通	
14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1														号し	
585 585 585 585 585 585 585 584 584 584 583 583 583 583														所	②
上 上 上 上 上 上 上 下 下 上 下 上 上 上															
12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1														在	統
上 上 上 上 上 上 上 上 上 上 上 上 上 上															
20 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1														冒	類
上 上 上 上 上 上 上 上 上 上 上 上 上 上															
貝葉 松蘇 筆ヲ 陶泓 貝蝶 碧継 六出 商嶺 火城 無本 險辺 窓ノ 露翰 水影														頭	従
: : : : : : : : : : : : : : :															
20 20 20 20 20 20 20 18 17 16 15 14 14														本	⑤
ウ 6 3 9 才 才 才 才 才 才 才 才 才 才															
2 5 9 8 6 5 2 8 8 7 6 2 7														所	書
ウ 2 5 9 8 6 5 2 8 8 7 6 2 7															
E			D				C			B					
28 27			26 25 24 23				22 21 20			19 18 17			16 15		
586 586			586 586 586 586				586 586 586			585 585 585			585 585		
下 下			下 下 下 下				上 上 上			下 下 下			上 上		
16 9			8 5 4 20				8 7 1			15 10 7			20 20		
17 16			9 8 5 下4				20 8 7			586 上1			下7 20		
雲夢			鶴林 君鍾 天育 老臊				往南 牽黄 蒼頭			我遣 迦葉 趙州			分貝 貧道		
: :			: : : :				: : :			: : :			: :		
25 24			3 3 3 2				23 23 22			2 1 1			21 21		
ウ 1 7			才 才 才 ウ5				ウ 5 才 1 才 8			才 3 才 3			ウ 6 ウ 3		
1 52			8 4 3 3				ウ 5 才 1 才 8			才 3 才 3			ウ 6 才 3		
3 8			1 7 3 2				6 4 8			4 7 3			7 3		

書陵部本は仏祖と儒者并雑部に分けるけれども、それぞれの内部での説明の配列順は②に殆ど一致する。先に述べたところとあわせて②と⑤との対応関係を示すと図のようになる。これによって、②の冒頭から順に、仏祖に関するものを前に、儒者并雑部のものを後にと改編したものが⑤であると考えられる。逆に、⑤のように二類に分けられているものを一本化した場合、説明の配列が図のような関係で②に一致することは考えにくい。次に、①④に存しない部分、①④に存したことを示している。この①④に存しない部分か、やはり策彦の作であるのか、或いは後人の増補であるのかは明らかでない。ただ、仮りに増補であったとしても、その内容や言語から見ても、策彦から時代的にあまり遠くない人物によるものと思われる。さて、この書の策彦作なることは、類従本の奥書によって認められてきたが、本文の記事からも首肯される。

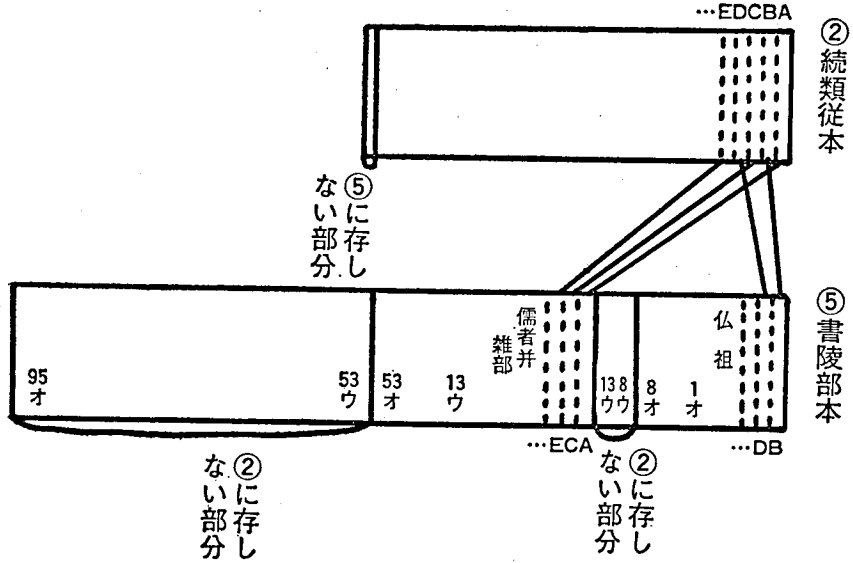
○予在西山之日與同社友聯句單ノ句ニテ有タソ。風娥迷ニ杏市一トシタレハ。露翰宿松庵トツケタレハ。結句一華和尚批點ヲメサレタソ(注6)(統類従五八三頁下1)。

○此前栗留秋更懶ト云句アリタニ。予杜字毎争禁トシタレハ。一華禾上園ヲメサレタソ(同五九〇頁上20、ト云句アリタニ(書陵部本))

右の如く自作の聯句を引用するが、これらは、足利学校遺蹟圖書館蔵『聯句集』(後掲)中に、策彦の作として見える。

□『策彦和尚筆記』

策彦に『策彦和尚筆記』(書陵部蔵)のあることは、『群書解題』が既に指摘している。(注7) 次の奥書がある。



右所写一冊者鹿王主盟喜伯尊藏之秘本也／尊藏与予者莫逆之友而
從少年之交也／譬如韓雲孟竟一日扣主之門而打閑話矣書／棚有此
一冊開而覽之則策彦大和尚之自筆而／古尊宿夜話也／再三拝覽遊
目尚矣不得／闕禿筆借与以塗焉莫容他見于嗟後世之／龜鑑也于時
寛永第四（丁）（或字を訂して）年初春廿九日

これによつて見ればこの本は策彦自筆本からの転写本である。そ
の筆跡も策彦のそれによく似る。『群書解題』は「策彦の談話を後
人が筆録したもの」とするが、策彦が「古尊宿夜話」を書きとめ
たものである。本文中には、江心承置・天用・大休宗休等の名
をあげて、その話を書きとめている。この三人は、いずれも策彦
と親交のある僧であつて、この筆記が策彦作であることは疑いない。
③『四六図』

次の諸本を調査することが出来た。（注）

○彰考館蔵『天隱和尚四六図』

○国立国会図書館蔵『天隱和尚四六図』

○東京大学史料編纂所蔵『巻而懐』

○松ヶ岡文庫蔵『江西四六説・策彦和尚四六図・聯句説・從二位
家隆御基礎銘并序』

これらの本は互いに入りがあつて、いずれも諸家の四六図を集
めたもので、策彦の四六図も含む。（注10）その中片仮名交りソ体であるの
は、「策彦四六図」と、「江西和尚蒲室御講時四六口伝」「虚字事
」「先哲之啓札」と、「提綱拈香」にはじまる文章などである。文
献1や、彰考館本の高田与清の識語は、策彦四六図以外の部分も、
策彦の口伝と見るが、それについては問題がある。例えば「提綱拈

香」ではじまる文章（国会本26ウ）（注11）は、策口彦伝かとも見られる
が、次の記事が存する。

○東福寺ノ季弘和尚於三鼻山金吾ノ宅一陞座其説法ハ唐韻也用、（注12）

ニニケ明ラニ「字」（注13）為レ韻字昔向和尚直ニ奉レ咨ニ其故ヲ一其
答語丁寧也知之（史料本20ウ14）

○了庵語レ予日近代ノ文章ハ仮名ヲ唐ノ字ニテカイタ者也（同24
オ10）

季弘大淑（一四八七）了庵桂悟（一四二五—一五一四）に直接
学んでいるところから見て、この部分は策彦の説明とは考えられな
い。もっとも、先学の説をふまえた策彦の口伝である可能性はな
くはない。策彦作の部分を「策彦四六図」にのみ限ると、それは極め
て短いものである。

④『策彦和尚初渡集』

記録中に片仮名交りソ体の部分を含む。伝本については文献1に
くわしい。文献1は妙智院蔵の第彦自筆本を翻刻するが、各巻首の
備忘記を省略している。実はこのこの備忘記にも片仮名交りソ体
の部分が存するのであつて、国語学的には看過し得ない。『大日本
仏教全書遊方伝叢書第四』（仏書刊行会 大正11・6）所収の『策
彦和尚入明記初渡集』および『入明記卷初事文集記』によつて補つ
ことが出来る。

⑤『策彦和尚再渡集』備忘記

『再渡集』は全文漢文体であるが、巻首備忘記に片仮名交りソ体の
文が存する。これも『大日本仏教全書』によつて見ることが出来る。

三 策彦の片仮名交りソ体文体の性格

片仮名交りソ体の文体は一般に抄物に用いられているものである。即ち、それは或る原典を注釈する場合に用いられている文体である。策彦のそれが特に注意されるのは、それが或る原典に対する注釈ではない場合に用いられており、また、入明記という記録にまで用いられているということによってである。ここに、抄物に用いられていた片仮名交りソ体の文体の、使用場面の拡大が認められるのであって、このことは口語体文章史上注目すべき事実であると言わなくてはならない。以下、この観点から、この文体の性格について考えてみたい。

(一) 原典離れ・注釈書離れ

『蠹測集』は、詩・聯句を作るに必要な語句を集めて説明したものであって、或る特定の原典を注釈したものではない。^(注13)この種の書物は、主として初心者への教育のためという必要から生まれてきたものである。そのような例として、『蕉窓夜話』『燈前夜話』『幼学詩句』などがあり、『中華若木詩抄』もその一つに数えることが出来る。^(注14)

『策彦和尚筆記』の記録するところは、詩・聯句作成に必要な知識に限らず、漢籍・仏典に関する知識、仏事の作法などをはじめとして、広範囲にわたっている。その説明も、「○○ハ(トハ)」と語句を提示しておいて説明する例だけでなく、自由な表現をとっている。その意味で、注釈書の性格を薄くしていると言える。^(注15)

『四六図』もまたある原典への注釈ではなく、図を示しつつ、四六文を説明したものである。

『初渡集』には、嘉靖一九年二月六日から一五日にわたって行われた、湖心硯鼎(一四八一—一五六四)の無門関の講義の記録が片仮名交りソ体でなされているが、その部分を除くと、いずれも、原典をもった注釈ではない。『初渡集』『再渡集』の巻首の備忘記が、文筆の応酬、詩句の唱和に必要な語句の集録の類で、『蠹測集』に近い性格のものであることは、文献上の指摘するところである。^(注16)

ここで、策彦の他の著作を見渡してみても注意されるのは、一つには彼にいわゆる抄物と言える著作がないことであり、一つには片仮名交りソ体の文体が用いられてもよさそうな書にそれが用いられていないことがあることである。前者については、策彦は、多数の抄物を作成して、その文体を他の著作にもひろげて用いたというのではなく、原典離れをした著作のみを作成しているようなのである。つまり、この原典離れは、『蠹測集』『策彦和尚筆記』について言えば、既に触れたように、要点のみを集約して注解説明するという、童蒙用として生まれたものであった。創作意欲、或いは表現意欲をみたくするための原典離れではないのである。後者については、単純には言えないけれども、ソ体の文体がさほど愛用されたものではないかも知れないことを疑わせる。

(二) 注記的・断片的性格

ソ体の文体が、策彦において、原典離れをし、注釈という場から離れて、もっと広い場で用いられているといっても、しかし、また、その文体は、注釈的性格をぬぐいさっているわけではない。むしろ、注釈的性格は依然強いと言ってよい。『蠹測集』と『策彦和

尚筆記」が注釈であり、注釈の性格が強いことは言うまでもない。入明記の備忘記もそれに近い性格をもっている。『四六圖』も、注釈ではないが、図に対する説明であり、『蒲室集抄』と密接な関係にあること^(注1)によって、江西の口伝以来片仮名交りソ体の文体でなされてきたものである。『初渡集』本文中に見える片仮名交りソ体の部分を見ると、一々例示しないけれども、これもやはり、概して注釈的説明的な部分に用いられているといつてよい。記録で片仮名交りソ体の文章を含む例としては、管見では、『鹿苑日録』元和二年九月二一日の条があるが、これもやはり注釈説明的な部分に用いられている。

ところで、この注釈説明で注意されるのは、入明記の備忘記に最も典型的に見られるように、この文体が注釈的・断片的性格を強くもつことである。『蝨測集』『策彦和尚筆記』も断片的な知識の羅列に過ぎない。この文体がひとつのまとまりをもつのは、『初渡集』の無門関の講義録の場合のように、原典があつたことなのである。

③ 固定的性格

この文体は、また、文語色が濃く、生氣に欠けている。

以上(一)～(三)を要するに、策彦の片仮名交りソ体の文体は、原典から自立しようとする動きを見せていて注目されるけれども、表現意欲にこたえる口語文体として、展開していく可能性は示していない。

四 おわりに

この一群の資料と同時代の惟高妙安の抄物との比較、この資料に見える注目される言語事象、等々については、これを別稿に譲らざ

るを得ない。

(注1) 拙著『詩学大成抄の国語学的研究』(清文堂 昭和50・9)

(注2) 1 牧田諦亮『策彦入明記の研究』(上、仏教文化研究所研究報告第一昭和30・10 下、法蔵館昭和34・3) 文献1と略称。以下同。

2 上村周映「入明使節としての周良禪師」(禅宗一〇五 明治36

・12以下)

3 上村親光『五山詩僧伝』(民友社 明治45・7)

4 徳富蘇峰『聽雨紀談附策彦和尚』(新成實堂叢書第一冊 民友社 昭和6・4)

5 足利衍述『鎌倉室町時代の儒教』(日本古典全集刊行会 昭和7・12)

6 北村沢吉『五山文学史稿』(富山房 昭和16・10)

7 小葉田淳『中世日支通交貿易史の研究』(刀江書院 昭和16・11)

8 荻野玉邦「日明交通史料としての一禅僧の消息」(積翠先生華甲寿記念論纂 昭和17・8)

9 平岡武夫『経書の伝統』(岩波書店 昭和26・1)

10 玉村竹二『五山文学』(日本歴史新書 至文堂 昭和30・5 増補版昭和41・11)

11 大窪太『蝨測集』(群書解題 昭和37・1)

伝記に『西山妙智三世策彦和尚略伝』(文献4翻刻)『前円覚策彦良禪師行実』がある。

(注3) ○東大史料本：新写一冊。茶色横稿模様表紙(二六・四×一八・六糎) 刷簽「続群書類従「九百五十七」(巻)」「小口・

背「統群書類従 九百五十七」と墨書。半面一〇行。全三

八丁。濁点あり。扉に「統群書類従卷第九百五十七ノ総檢校保

己一集ノ男源忠宝校ノ雜部百七ノ蠶測集」。内題「蠶測集（原書）

一冊付所製」。奥書「此一集策彦和尚製作而与小喝云々忍直書ノ

之以与良愆若不學則可返進可動々々矣ノ慶長六年暮春吉辰 花

押ノ（本文二丁半あり）此一冊月溪和尚某被下候也ノ元和四年

ノ六月吉辰 關待者（花押）此一冊宗關待者与某ニ被下也ノ品収

花押ノ從品収首座到于格翁和尚和尚又付与英僧雜者也ノ筆者 井

田九三ノ校合 搞忠韶」。

○「蠶林兩部抄」本…三養軒一翠が如月寿印の『幼学詩句』と策

彦の『蠶測集』とを編集。貞享四年刊。『国書総目録』によれ

ば京都大学顕厚文庫・東京教育大学・駒沢大学図書館に伝存。

筆者は駒大本を調査した。

整版二卷二冊。濃紺色表紙（二二・三×一四・八糎）原刷題簽

「蠶林兩部鈔幼学詩句乾」坤冊は墨書「蠶林兩部鈔鈔蜀集坤」。四

周双辺（二五・八×一・〇糎）版心小黒口「林幼学（林蠶測）

幾」。内題「蠶林兩部抄卷上幼学詩句」東山如月和尚撰「蠶

林兩部抄卷下蠶測集 嵯峨策彦和尚作」。貞享丙寅冬十一月

上浣豊嶺小沙弥因循子書の序文「貞享第四丁卯孟春盡辰ノ三

養軒一翠跋（印）「微達」の跋文あり。刊記「高辻通永原屋孫

兵衛梓行」。表紙見近に朱印「草鹿丁卯次郎ノ君昭和二年二ノ

月以年滿六十ノ辞吾住友家理ノ事同人胥謀呈ノ圖書以為紀

念」。上四〇丁、下三三丁。漢字に振仮名を多く付す。濁点あり。朱引・朱句切点を付す。圖書番号一五二・四一四三。

○国立国会本…新写一冊。新装薄茶色表紙（一九・八×一五・七

糎）外題簽「蠶測集全」。原白色表紙。外題直接「蠶測集」と

墨書。扉に「蠶測集」と墨書。巻首朱印「宮内省ノ圖書印」。首

欠。「相国寺海雪和尚所持ノ」（統群従五八七頁下6）から存

する。そのため同館目録は著者を「釈海雪」に誤る。尾に増補

あり。朱引・朱句切点を付す。圖書番号わ〇四九一二九。

又、「和本を主体とした古書と典籍展示即売会目録」（書林

会 昭和48・5）に一本が見え、図版によればこの系統の本で

ある。

○書陵部本…江戸後期写一冊。新装紺色表紙（二〇・三×一三・

七糎）外題簽「蠶測集 全」と墨書。原共表紙。外題直接「蠶

測集」と墨書。綴目に丁数を墨書。濁点あり。圖書番号三五三

一八七〇。

右のほかに、京都大学蔵大正書写一冊と国語研究所蔵江戸初期写

『湖鏡集』二冊所収本とを調査し得たが、それについては別稿に

譲る。又、建仁寺両足院に写本一本が伝存するが、筆者未見。

（注4）⑤は巻尾については③④に一致する。また、本文も③④に

近い。⑤は誤写が多いが、①④よりも原形をとどめていると見

られるところもある。

（注5）例えば「水影…」「露輪…」といった、ひとまとまりの説

明をどの範囲で認めるかは、①と⑥との改行によった。

（注6）諸本間の本文の異同は最少限にとどめる。以下同。

（注7）新装茶色表紙（二五・七×一九・二糎）寛永四年写一冊。

新装題簽「策彦和尚筆記 完」と墨書。墨付六六丁。圖書番号一

一一一六。『国書総目録』には「旧三井鷲軒」も見える。

（注8）江心・天用と策彦との親交については文献1（二四・六

(注9) ○彰考館本：室町末江戸初期写一冊。茶色縦縞模紙表紙(

二七・七×一八・八糎) 外題簽「天隱和尚四六圖 完」と墨書。表紙にラベル「辰九」。小口「四六圖」と墨書。朱印「學

屋/藏書」「潜齋/閣藏/書記」あり。奥書・識語(45ウ)「策

判/右一々有口傳皆以于筆舌之外者也幻雨從妙心寺三年/嗟峨

工在以間茲終未許之然後身令カ刀直又三年妙智^{在寺}/後種々

懇望以起請文伝受之幻雨時年三十五歳也策翁/文章之奥樞一点

モ不残之起請文有之也以其人可伝授之/者也云々/永祿十年卯

五月三月/(別筆)右策元禪師四六文章口伝文政八/年八月朔一

読且下巻占了東/都松屋主人源与清(次の朱書の一文を、
消した上を替く)「右策元禪

師一卷文化十四年二月/十九日一読了 松屋主人高田与清」

(巻末73ウ) (朱書)「右属文階梯一卷」及附録者^{右條未}知何

人撰也/文化十四年二月十九日一読了/三瀧漕運主事高田与清

(花押) /再按^ニ属文階梯^ハ者永祿十年五月僧^ノ幻雨^カ之所^レ撰^ル

也与清又識^ス (墨書) 右文章口傳之書中載道春翁文則寬

永年間之著作也/按始末二巻合為一卷上巻策元口傳下巻古文集

宜号/作文階梯焉 与清/文政八年八月朔

「積翠軒文庫善本書目」一二七に見える「四六文章」は、その奥

書から見て、彰考館本と同系の書と見られる。

○国立国会本：江戸初期寛永頃写一冊。焦茶色表紙(二七・七×

二〇・二糎) 外題簽「天隱師四六圖」と墨書。表紙に朱筆で「

保」と書く。小口「四六圖」と墨書。「龜田文庫」ほか朱印。

表紙に古文書と版本反故とを用いる。半面一四行。朱引・朱句切

点あり。本文中に、元和六年の拈香之拙語、寛永一六年の香語

なども見える。図書番号特一〇〇〇一三〇。

○東大史料本：慶長一二年写一冊。新装茶色表紙題簽「卷而懷」。

原共表紙(二七・九×一九・三糎) 外題直接「卷而懷此冊ハ写本
長崎向ノ四六文章ノ原本」と墨書。背に墨書「卷而懷」。共表紙裏

に墨印「勢州/阿曾/片山寺藏」。奥書・識語「右策彦和尚之

秘本也余(註記)南化国師」幸借取于一方袍贈享之玉鳳(註記)妙

心」室中畢矣/南化和尙秘甚矣予再三請而以写畢矣

禹門受/(ウラ)于時慶長村九月廿三日尾州熱田中捨持院於

西窓下書之了(墨印)/ (原裏表紙見返) 此冊鏡清真跡矣乎/

文明子誌之」。半面一六行。朱引・朱句切点。この資料につい

ては文献1が扱っている。

○松ヶ岡本：江戸初期写一冊。茶色表紙(二三・五×一七・〇

糎) 外題直接「江西四六説/策彦和尚四六圖/聯句説/從二

位家隆御墓碣銘并序」と墨書。墨付三二丁。図書番号クハ四二

六。

右のほか建仁寺兩足院に『天隱和尚四六圖』が存するが未調

査。また、『図書総目録』には大中院とあるが、筆者調査の際に

は見えなかった。文献6は『策彦和尚四六圖』を翻刻する。但し

底本を示していない。

(注10) 東大史料本は、錯簡の多い本である上に、誰の四六図を集

めているのかを示さないが、他本と対比してみると、「天隱和尚

四六圖」「常庵和尚四六転語」「虎関和尚四六法」「江西和尚蒲室

御講時四六口伝」を含むことが判明する。「策彦四六圖」もまた

それと明示されていないが、一八丁の図と説明は他本の策彦四六

図と殆ど一致する。

(注11) 東大史料本19オ1-20オ14、23ウ3-6、23ウ12-24オ8、20オ15-20ウ2、24オ9-16、20ウ3-22オ9。なお、この「提綱拈香」ではじまる文章と、『江西和尚蒲室四六講時伝』とだけからなる『四六図』も伝存する。即ち、松ヶ岡文庫蔵『禪偈作法解説』一冊がそれである。

室町時代末写一冊。新装茶色表紙(二六・三×一八・五糎。外題簽「禪偈作法解説」と墨書。識語(本文と別筆)「臨深山大仙寺常住本(朱印)」「大仙寺」。半面一二行。朱引・朱句切点。図書番号クハ六五五。

(注12) 大日本仏教全書は平仮名交りで翻刻しているが、この本は『初渡集』の本文も平仮名交りで翻刻しており、原形を改めたものと見られる。

(注13) 『叢測集』は、「爛葛藤」(叢林兩部抄)「詩話」(文獻5)「聯句に用いる故事を、童叢のために解釈したもの」(文獻1)等ととらえられてきた。なお、『叢測』については、叢林兩部抄所収本・書陵部本の冒頭に「叢ハハマクリ貝ソ其チイサキモノニテ大海ヲ測ト云意ソ」とあり、他の抄物にも「叢測トワツカノニ云ソ」(国会本玉匣六61ウ6)と見える。わずかの語句をとりあげるについて、策彦がどのような語句を特に選び出しているかは、今後明らかにされなくてはならない問題である。

(注14) 拙著『詩学大成抄の国語学的研究』参照。

(注15) 『策彦和尚筆記』の奥書は、この書を「夜話」と呼んでいる。『蕉窓夜話』「燈前夜話」という書名もあるから、これらの、特定の原典から離れた、また、注釈書的性格の薄い一群の資料を「ソ体夜話の類」としてまとめて見ることが可能かと考え

る。鈴木博「ロドリゲス日本大文典の関東方言の条に關して」(国語学45 昭和36・6)同「周易抄の国語学的研究」(清文堂昭和47・3)が引く『統翠和尚夜話』もこの種の資料の1か。筆者未見。また、時代は下るが、月舟宗胡(二六一八-二六九六)に『大乘中興月舟老和尚夜話』(松ヶ岡文庫蔵江戸前期写一冊)なる片仮名交りソ体の書がある。

(注16) 先学の研究を参照して策彦の著作や所持書入本等を類別して示すと、次の通りである。これらはいずれも漢文体である。

(1) 詩集※ ①『謙齋詩集』(『策彦和尚詩集』) ②『謙齋南遊集』

(2) 聯句・漢倭聯句※ ①『城西聯句』(『九千句』) 江心承童と共撰、嘉靖一八年(二五三九) 豊坊序、弘治二年(二五五六) 惟高妙安跋) ②『策彦三千句』(江心承童と共撰、永祿元年(二五五八) 惟高妙安跋) ③『漢倭聯句』(里村紹巴と共撰、永祿二年(二五六九) 以前成立)

(3) 記録類※ ①『駭程録』(嘉靖一十九年(二五四〇)) ②『於定海并嶽山下行備銀帳』(同二六年(二五四七)) ③『策彦和尚一番渡唐・二番渡唐』④『謙齋雜稿』(天正七年(二五七九)、和歌は平仮名書きまたは片仮名書き) ⑤『策彦自伝』(元龜四年(二五七三))

(4) 序文・跋文※ ①曲直瀬正盛『啓迪集』序(天正二年(二五七四)) ②鉄山宗純『鉄山独吟』点跋(永祿八年(二五六五)) ③疏・贊・取名等※ ①『山門疏』②大内義隆寿像贊(天文二二年(二五五三)) ③策彦自讃渡唐天神像(弘治元年(二五五五)) ④『前南禅湖心大和尚真讚』(永祿二年(二五六八))

⑤三章会彰取名(永祿三年(二五六〇))

藏無刊記十行版（奥村三雄『聚分韻略の研究』影印）のように、片仮名交りノ体書込のある本が伝存する。ただし、筆者は、文献1が示す巻首半葉の写真によって判断しているので、この本の他のところに片仮名交りの書込が存するかも知れない。

（注18）文献10参照。尊経閣文庫蔵『鰲頭箋注蒲室集』（室町末江戸初期写三冊）足利学校遺蹟図書館蔵『蒲室集抄』（室町時代写四冊）は月舟寿桂の抄であるが、いずれも巻首近くに「江西蒲室

四六講時口伝」をのせている。「蒲室集」の講義の場で、四六文の一般論も講ぜられたのである。

「付記」貴重な資料の閲覧を許可された関係所蔵者各位にあつくお礼申し上げる。また、調査の一部は昭和四八年度東洋文庫研究員として行ったものであり、三島海雲記念財団から研究奨励金を受けた。ともに記して謝意を表する。

— 愛媛大学助教授 —